

探究を楽しみ、学びを自己の生き方に生かそうとする子どもの育成

小 学 校 吉岡 舞
研究協力者 山内 孔（愛媛大学）

1 主題設定の理由

本プロジェクトは、子どもが、地域のもの・こと、人と出会い、つながりを構築したりかわりを深めたりすることを通して、地域における自己の存在を認知し、地域への愛着を持つことをねらいとする。そして、地域のために何らかの行動を起こし、地域の役に立つ経験を重ねていく中に、〈自己効力感〉の高まりがあると考え。子どもは、様々な集団の中で生き、成長していく。学校という集団から、地域社会、更には国際社会へと、その集団は大きくかつ複雑になっていく。本プロジェクトにおいて、地域というフィールドの中で自分と地域とのつながりについて探究することは、子どもが自分の将来をたくましく切り拓いていくための素地となるであろう。

くすのき学習の軸となる総合的な学習の時間では、探究的な学習の過程を重視している。各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものにするとともに、各教科等を越えた学習の基盤となる資質・能力を育成することを目指している。探究的な学習の過程を重視することで、自ずと「主体的・対話的で深い学び」につながっていくと考える。そこで、〈自己効力感〉を原動力とした探究的な学習の在り方をさらに研究し、子どもとともに「深い学び」を創り出したいと考える。

課題を追究し、解決していくという探究的な学習の過程で身に付ける見方・考え方は、教科等の学習の場面で生かされるだけでなく、今後の学習や地域社会、国際社会の一員としての生き方においても活用される、汎用的な力に結び付く。子どもが、身に付けた力を教科等の学習や生活の中で「生かし、発揮しよう」としたとき、学びが役に立つ実感を得ることができ、そこに「深い学び」が見いだされる。課題を見付け、解決のために追究していく探究的な学習の過程を楽しみ、学びを生かせることに喜びを感じることができれば、自己の生き方を広い世界で前向きに切り拓いていくことができるだろう。

このような考えから、くすのき学習【地域】プロジェクトにおける研究主題を「探究を楽しみ、学びを自己の生き方に生かそうとする子どもの育成」とした。

2 くすのき学習【地域】プロジェクトにおける「子どもと創る『深い学び』」

(1) 子どもと共に学びをつなぐ「くすのき学習【地域】プロジェクト」の授業づくり

まず、くすのき学習【地域】プロジェクトにおける「深い学び」について、探究的な学習の過程と、そこからつながる学習や生活の中で、「深い学び」を実現している子どもの姿を次のように考えた。

「深い学び」に達した子どもの姿

- 自ら設定した課題を追究する中で、協働することや解決できることに楽しさを感じている。
- 身に付けた資質・能力を、各教科等の学習と相互に生かしている。
- 探究の面白さを知り、学習や生活の中で探究心を持って活動している。
- 身に付けた資質・能力が汎用的なものであることに気付き、自分と地域とのつながりという広い視野を持って自己の生き方に生かそうとしている。

これらの姿から、くすのき学習【地域】プロジェクトにおける「深い学び」を、

探究的な学習で身に付けた力を生かし、発揮することで、自己の生き方に役立つことに気付くことができる学び

と捉えた。

子どもと、「学習材」「他者」「自分自身」をつなぐために、探究的な学習を効果的に取り入れた授業づくりを進めていく。「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究的な学習の過程を質的に高める工夫や、他者と協働して課題を解決しようとする学習指導の工夫、学ぶことの意味や価値を考えたり、学んだことを自己の生き方につなげようとしたりすることのできる振り返り等について研究していく。

(2) 子どもの学びをつなぐ指導の手立て

ア 「学習材」とつなぐ手立て（主に「出会い」の場面）

- ・子どもの興味・関心を喚起し、探究にふさわしい課題を設定することのできる「学習材」の開発と、そのための子どもの実態の把握
- ・自ら探究したいと思える課題意識を持つことのできる「学習材」との出会いの工夫
- ・探究的な見方・考え方を働かせながら「学習材」とかかわることのできる場の工夫
- ・探究の過程での自己評価

本プロジェクトにおける探究的な学習では、学びの場を地域社会へと広げ、子どもの興味・関心などから課題を設定して探究していく。探究的な学習では、自ら探究したいと思えるような課題意識をどのように持たせるか、そして、学習に向かう意欲をいかに継続させるかが大きなポイントとなる。もの・こと、人などを捉える感性や問題意識が揺さぶられて、探究的な学習への取組が主体的で真剣になるためには、子どもの「知りたい」「調べたい」という強い思いが必要である。子どもの興味・関心を喚起させるためには、発達段階や既習の知識・技能、生活の実態等に沿った「学習材」と出合わせなければならない。設定した課題が探究にふさわしいものであるか、自分事として探究の必要感を持つことができるかということが大切である。効果的な体験活動を開発したり、子どもの身近な生活から課題を見付けられるようにしたりすることも重要である。「学習材」との「出会い」の場面で、子どもが驚きや疑問を感じたり、自分の意識とのずれや違和感に気付いたりするような手立てを図り、探究に向かう必要感を持たせなければならない。体験活動で実感したことから課題を見付けたり、地域の方やその道の専門家との出会いから自分にとって価値のある課題を設定したりする。じっくりと思考する場を設け、日頃感じていた問題を改めて見詰め直すことができるように、子どもと「学習材」をつないでいく。

設定した課題について探究していく場面では、探究的な見方・考え方を働かせながら取り組むことができるような場の設定を工夫したい。例えば、調べ学習では言葉による見方・考え方、数学的な見方・考え方、理科の見方・考え方など、教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方を繰り返し活用できる場を設定する。また、これまで身に付けた教科等の見方・考え方をどのように用いれば課題が解決できるのかを見極めるといふ、総合的な学習の時間特有の見方・考え方を働かせるための手立ても必要である。よりよく課題を解決し、学びを自己の生き方に生かそうとする資質・能力を育成するために、それらの探究的な見方・考え方を働かせるための方法を探りたい。

探究の過程において、自己評価カードを活用してこまめに学習を振り返ることで、単元を通して探究に対する意欲を継続し、学習材とのつながりを持続させる。小さな課題解決の場面でも自己を振り返り、一つ課題を解決できたことを実感することで、成功体験を獲得させたい。探究的な学習において、課題の追究が進んでいることに手応えを感じることで、探究の楽しさを味わわせたい。

イ 「他者」とつなぐ手立て（主に「追究」の場面）

- ・必要感のある話合いを生む問いや課題設定
- ・対話的な学びのための思考ツールの効果的な活用
- ・協働的な学習を創り出すための教師のコーディネート
- ・探究活動における相互評価や他者評価

探究的な学習に協働的に取り組むためには、「他者」との対話が欠かせない。そして、その対話を深めるためには、まず、必要感のある話合いの場を設定することが大切である。子どもが、「友達と話したい」「いろいろな意見を聞いてみたい」と思えるような問いや課題を設定する。また、子どもと「他者」をつなぐため、対話的な学びを生み出す思考ツールを活用したり、教師が話合いをコーディネートしたりしたい。収集した情報を整理・分析したり、自分の考えをまとめたりする場面や、共同学習者とのかかわりの中で、自分の思いや考えを伝えたり、互いの考えを出し合っよりよいものを生み出したりする場面では、適切な思考ツールを選択し、有効に活用する。

探究活動において、相互評価や他者評価を効果的に取り入れる。共同学習者との相互評価やゲストティーチャー等からの他者評価により、「他者」に共感したり協働的な学びを実感したりすることができ、子どもと「他者」をつなぐ一つの手立てとなるだろう。

ウ 「自分自身」とつなぐ手立て（主に「振り返り」の場面）

- ・過去・現在・未来の「自分自身」とつなぐ手立ての工夫
- ・自己の学びや変容、成長を実感することのできる振り返りカードの工夫
- ・身に付けた資質・能力が発揮される場の設定
- ・学びの成果を具体的に感じられる手立ての工夫

学習を振り返り、自分の学びがどうであったかをじっくりと見詰め、自己の学びや変容、成長を実感することができるように振り返りカードを活用する。例えば、「学習材」との「出会い」の場面では、どうすれば学習課題を解決できるのか、そのために自分は何をすればよいか、これまでの学習や生活経験の何が生かせるかといった見通しを持たせることで、過去の「自分自身」とつなぐ手立てとなる。探究活動の場面では、「他者」の考えに触れ、課題に対する自分の考えを練り直したり捉え直したりすることで、現在の「自分自身」の変容や成長に気付かせる。「振り返り」の場面では、学びを自己の生き方にどう生かしていくか考えさせることにより、未来の「自分自身」を見詰めさせる。このように振り返りの視点を与えたり、振り返りカードを工夫したりすることで、自己の学びや変容をより深く認知することができると思う。

学びの中で、子どもと「自分自身」をつなぐためには、自分が課題を解決できたことや「他者」のために役立ったことを目に見える形で実感できるようにすることが大切である。共に学習を進める共同学習者からの評価や、ゲストティーチャー等の探究活動を通してかかわった人からの評価を子どもに返すことで、充実感や達成感、他者に感謝されることによるやりがいや喜びを味わわせたい。

身に付けた資質・能力が発揮される場を、教科等の学習やくすのき学習での新たな課題解決の場面に設けるようにする。中学年から高学年へという時間軸のつながりも意識しながら、教科等横断的な単元を構想し、子どもと学びがつながる場を設定する。

単元の終末では、探究的な学習をしたことは自分にとってどのような意義があったのか、探究的な学習を通してできるようになったことは何かを考えさせる。このような身に付けさせたい資質・能力について、教師からの働き掛けと子どもとの話合いによって決定し、子どもに意識させておく。そして、この学習を通してどのような力が育ったのかを子ども自身が把握することで、成長を実感させたい。さらに、それらの資質・能力は汎用的なものであり、これからの自分の生き方で生かされる力であるということにも気付かせたい。

(3) 「子どもと創る『深い学び』」における評価

ア 評価の視点

(7) 指導者評価

各単元で育てたい資質・能力と、目指す子どもの姿を、「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの観点で単元開始前や授業前に具体的に設定し、「深い学び」が表出した姿を見取る。授業前後や単元前後など時間の経過の中で子どもの変容を見取るとともに、学習の様子や成果物、記述等の幅広い空間で評価していく。

「知識・技能」については、探究的な学習の過程において獲得される知識や技能と、それらが概念的な知識へと高まったものが、どの場面でどのように獲得されるのかを整理し、見取っていく。

「思考力、判断力、表現力等」とは、探究的な学習の過程で獲得される力のことであり、また、各教科等の学習や生活において活用されるものでもあるため、教科等横断的な単元の中で評価していく。

「学びに向かう力・人間性等」については、単元や各教科等、学年を越えて育まれるものであることから、時間軸でつないだ長期的な視点で見取っていく。

(4) 自己評価

子どもが探究的な学習を振り返り、「自分自身」の変容や成長を実感し、学びを自覚できるようにする。

- ① これまでの学習を振り返る自己評価
- ② 自分の学習結果を振り返る自己評価
- ③ どのような学習をして、どのような学習活動が有効だったのかを振り返る自己評価
- ④ 自己の変容を振り返る自己評価
- ⑤ 次への学習に向けての見通しを持つ自己評価

子どもがこれらの視点を持って自己評価できるように支援していく。また、単元の終末には総括的な自己評価ができるように、これら五つのことを整理して自己評価させる。

(ウ) 相互評価・他者評価

子どもに協働的な学習のよさや自分の学びに気付かせるために、相互評価や他者評価を取り入れる。他者評価を行うことで、子どもをより多面的に捉えることができ、指導者評価と併せて評価を充実させることにもつながる。

イ 評価の具体的な手立て

- ・評価のための観察記録の蓄積
- ・学びを見詰め、振り返ることで、「自分自身」とつながる自己評価
- ・相互評価・他者評価の効果的な活用

くすのき学習において、資質・能力が身に付いているかという見取りは、直接の指導者である教師の観察によるところが大きい。目の前の子どもの様態を観察し、表情や発言、活動の内容から「深い学び」が創り出されているかを見取っていく。視点を明確にして、子どもの表情や発言をじっくりと観察するとともに、探究的な学習からつながる教科等の学習や実生活の中で見取っていかなくてはならない。そのために、以下の点に留意していきたい。

- ・観察記録を蓄積して、時間軸でつながる長期的な変容を見取る。
- ・子どもの姿や作品、板書などを画像や映像として残し、事後の評価の材料として蓄積していく。
- ・子どもの内面が表出されるようなワークシートや振り返りカードと、それらを積み重ねたポートフォリオなどの評価材料を活用する。

共同学習者同士による相互評価や、ゲストティーチャー、家庭からの他者評価は、子どもの姿を空間軸でつなぎ、多面的に捉える評価の材料として有効である。また、これらの評価の方法は、子どもと「他者」をつなぐ手立ての一つとしても効果的である。様々な手立てを講じ、検証していきたい。

(吉岡 舞)